

エビデンスがもたらすアレルギー診療のパラダイムシフト

大矢 幸弘

国立成育医療研究センター・アレルギーセンター

まだ離乳食が始まっていない乳児のアトピー性皮膚炎患者を採血し抗原特異的IgE抗体を調べると、鶏卵や牛乳などの食物アレルゲンに陽性を示すものが少なくない。まだ、本人は口にすることがないのであるから、妊娠中に母親が食べた食物抗原が臍帯を介して胎児に移行したり、授乳中の母親が食べた食物抗原が母乳を介して乳児に入ったせいではないかと考えられていた。

そこで、授乳中や妊娠中の母親が卵や牛乳を食べないようにすれば、生まれてくる子どもの食物抗原への感作を防ぎ、アトピー性皮膚炎が予防できるのではないか、という考えが広まった。しかし、欧州で行われたランダム化比較試験の結果は、妊娠中も授乳中も母親の食物制限による児の食物アレルゲン感作予防効果はなくアトピー性皮膚炎の発症も予防できない、というものであった。

その後、未だ食べたことのない食物になぜ感作を受けているのかという疑問に対しては、経皮的感作という現象が確認され、また乳児の寝具から採取したホコリの中に鶏卵やピーナツが存在するという事実から、湿疹で皮膚バリアの低下した乳児が食物アレルゲンに感作を受けやすくなるメカニズムで説明がつくことになった。

さらに本人が食べ始める時期についても、従来は念のために遅くから始めるという指導が卵やピーナツなどでは行われていたが、開始時期が遅いほど、卵やピーナツのアレルギーが多いという事実が観察研究でも介入研究でも実証されて、従来の常識は大きく変わるようになった。